

技術・家庭科（家庭分野）

橋本 正恵

共同研究者 綿引 伴子（金沢大学）

1. 伝統文化教育を進めるにあたって

（1）本校の研究との関連

本校では、平成26年からの3年間ESDに関する教育研究に取り組んだ。ESDに関しては、多くの学校がその実践や研究に臨んでいるが、本校の取り組みの特色は各教科の学習において主に取り組むということである。総合的な学習の時間などで扱われることの多いESDに、各教科等がそれぞれの学習内容の中で取り組むことを中心して全教科等で取り組んだ。更に、全教科等の学習で取り組むことに加え、それらを教科横断的に連携させてカリキュラムマネジメントを行ったことも、本校の研究の特色であると言える。教科等を横断した学習や複数の教科で連携した学習を構築する時、技術・家庭科の役割の特性は生徒の生活と様々な教科等で学習した内容を結びつけることができることにある。資質・能力の育成に関わって、学んだことを社会で生かす能力の必要性が重視されて久しいが、技術・家庭科はその学習内容そのものが、一人一人の生徒の生活に即したものであるから、その特性をより生かして他教科の学習内容と各生徒の生活の橋渡しとなることができる。

技術・家庭科の各学習内容は、生徒の生活そのものを扱う学習であり、各教科等で学習した内容が現在や将来の生活とどのように関わって行くかを示す手段となる。そのような教科の特性を生かして、技術・家庭科の学習では常に個々の生徒の生活の中にある課題や疑問を見取り、その解決に向けて思考をすることをねらった題材計画を工夫していくことを重視している。

以上のような本校の研究の方法や体制と教科の特性を踏まえて、家庭分野の学習は以下の二点を目指したい。

- ・教科等の連携の要となる。
- ・教科等で学んだことと生徒の生活とを結ぶ役割を担う。

（2）新学習指導要領に向けて

これまででも、家庭分野の学習では衣食住に関する学習において、和食や和服、和の住まいなどについて扱ってきており、伝統文化教育に関しての実践は以前より取り組まれてきた。

新学習指導要領では、技術・家庭科（家庭分野）の目標について、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」としている。またその解説には「生活の営みに係る見方・考え方を働かせとは、家庭分野が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫することを示したものである。」とある。家庭分野の学習内容全体に共通する視点の一つとして「生活文化の継承・創造」があげられており、家庭分野の学習と伝統文化教育の関連の深さが分かる。取り扱う題材構成によってどの視点を重視するかを定めることが必要ではあるものの、家庭分野の学習全般にわたって、これまで受け継がれてきた生活文化を創造し伝えることを意識することが必要であると思われる。

以上のような新学習指導要領の内容を踏まえて、家庭分野の学習では以下の二点を意識している。

- ・家庭分野の全ての学習において、生活文化の継承・創造の視点を意識する。
- ・特に衣食住に関わる題材において、これまで継承されてきた生活文化と自分の生活との関連に気づき、よりよい生活について考えようとする態度の育成を目指す。

2. 資質・能力の育成にあたって

(1) グローバル人材の育成について

新学習指導要領解説の「社会の変化に対応した各内容の見直し」には、グローバル化に関して以下のように記されている。

「『B衣食住の生活』においては、食育を一層推進するために、献立、調理に関する内容を充実するとともに、グローバル化に対応して、和食、和服など日本の生活文化の継承に関わる内容を扱うこととしている。」

グローバル人材を育成するにあたって、家庭分野がその学習において、特に重点的に扱うことのできるのは「生活文化の継承」の部分である。つまり、日本人としてのアイデンティティの確立に関わる部分を担うことはもちろん、それらを継承していく生活の主体者としての態度を身に付けることも、家庭分野の学習では目指すことができる。また、前述した新学習指導要領解説などにもあるように、家庭分野の「生活の営みに係る見方・考え方」には、「協力・協働」の視点も示されており、よりよい生活の実現に向けて、家族や地域の人々をはじめとし、様々な人々と共に社会を作り上げていくことができるようになることも目標である。

以上のように家庭分野の学習の内容を考えると、本校が育成を目指すグローバル人材の要素 i～iii と家庭分野の学習内容との関連を考えると以下のようにまとめることができる。

要素 i：語学力・コミュニケーション力 → 協力・協働の視点で学習内容を捉える。

要素 ii：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感
→日本の生活文化を継承する視点で学習内容を捉える。

要素 iii：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー
→日本の生活文化を継承する視点で学習内容を捉える。

(2) 関連・連携の考えられる教科等について

前述の本校の研究との関連で述べたように、家庭分野の学習は一人一人の生徒の生活を中心としたものであり、他教科等の学習と生徒の生活とを結びつけることができることが、教科の特性であると考えている。ESD研究の実践を生かして、より多くの教科等をつなぐ役割を担いたいと考えている。家庭分野でこれまでも扱っていた「和食」や「和服」に関する学習は、社会の地理分野の地理的条件と暮らしの工夫の学習などと連携して行ってきた。また、それらの体験を踏まえた学習について、討論したり、まとめて発表したりなどする学習において、国語や英語との連携がそれぞれの学習のねらいを達成するために効果的である。伝承されてきた生活の知恵を扱うような学習では、その事象を科学的に説明するために理科の学習との関連を考えることもできる。これまでに調理や衣服の洗濯などの学習において、理科との連携を試行してみた。今後は、伝統文化を扱うことでねらえる効果を明らかにすることも含めて、より多くの教科等との連携を目指したい。

3. 成果と課題

(1) 成果：今年度の実践について

はじめに、先述の「1. 伝統文化教育を進めるにあたっての(1)本校の研究との関連」で挙げた2つの目指すところに沿って、今年度の実践を振り返る。

○教科等連携の要となる。

各教科等が伝統文化に関わって計画する実践に関して、その都度、家庭分野の授業での連携の可能性を考えた。実践事例にもあるように、英語や社会などの教科とは連携した授業を構築することができた。家庭分野の授業について検討をする時も、常に他教科等との関連がないか、連携の可能性はないか等、常に意識をして題材を計画することができた。一方、それぞれの教科の内容と連携することはできたものの、複数の教科等を結びつける要となることに関しては、積極的な取り組みができなかった。今年度は、それぞれ科等が伝統文化に関わる授業実践を試行する段階であり、複数の教科が結びつくまでには至らなかった。来年度への課題としたい。

○教科等で学んだことと生徒の生活とを結ぶ役割を担う。

授業で伝統文化を扱うにあたって、各学習の導入部分では常に一人一人の生徒の経験や生活を踏まえることから始めた。それぞれの生徒は、各々に異なった生活文化を持っているが、その中に潜んでいる日本の伝統文化に改めて目を向けることから始め、教科の学習を経た後にその知識や技能を生活の中で活用できる仕組みを意識して学習計画を行った。それまで、普段の生活の中にある伝統文化についてあまり意識していなかった生徒も多かったが、学習を機にその良さや受け継いでいくことの重要性について考える様子が授業のワークシートへの記述などから見られた。今年度は、各生徒の生活の中の伝統文化に目を向けることに関しては、多くの生徒が達成できていた。来年度は、将来の生活も視野に入れ、どのように伝統文化と関わっていくかについてや、伝統文化を継承・発展させていく担い手として、どのように生活を創造するのか、といった視点を取り入れていきたい。


実践事例

技術・家庭科（家庭分野）1年

授業者 橋本 正恵	授業日 5月15日(月) 3限～6限	
授業クラス, 教科等名	1年1～4組	関係・連携の考えられる教科等 社会(地理) 英語
扱う伝統文化 ・生活文化 ・地域文化 ・伝統文化 ・現代の日本文化	授業内容 ・「6つの食事の役割」のなかの「食文化の伝承」について理解する。 ・自分の生活を振り返り、これからの生活の工夫につなげる ・日本食の配膳の仕方について学ぶ。	
特に関わる要素Ⅰ～Ⅲ 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力 要素Ⅱ：主体性・積極性, チャレンジ精神 協調性・柔軟性, 責任感・使命感 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ	教科等で身に付けたい力（本時について） B(1)ア 「食事の役割」 ・食事の役割について理解する。 ・自分の食生活に興味を持ち、よりよい食習慣について考え、日常生活で実践しようとする	
授業のポイント・流れ 前時までに食事の主な役割として以下の6つを確認しておく。 「生命や健康の維持」「エネルギー」「成長」 「生活のリズム」「人と人とのつながり」「食文化の伝承」 この中から、「人と人とのつながり」「食文化の伝承」を取り上げて扱う。 とともに食事をするすることで、コミュニケーションが生まれる。同時に食文化の伝承ができる。 「インド」「ドイツ」「ニュージーランド」の食生活の場面の写真（「地球の食卓」より） ・三大食作法の割合グラフを提示し、日本の食生活との相違点について話し合う。要素Ⅲ ・和食の配膳の仕方について確認する。		
		<p>世界三大食作法</p> <p>ナイフ・フォーク 30%</p> <p>箸 30%</p>
食生活チェックリストを使い、自分の食生活について振り返る。 今後大切にしたい食文化の作法について、考えをまとめる。		


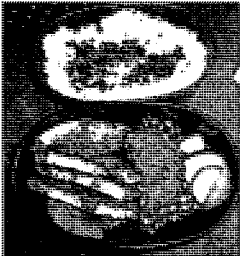

実践事例

技術・家庭科（家庭分野）1年

授業者 金沢大学教育実習生 橋本 正恵		授業日 9月 25日（月） 3限～ 6限	
授業クラス, 教科等名	1年 1～4組	関係・連携の考えられる教科等 体育（柔道） 英語	
扱う伝統文化 ○生活文化 ○伝統文化 ・地域文化 ・現代の日本文化		授業内容 ・浴衣の着想体験。 ・衣服の構造（和服と洋服，平面構造と立体構造）の学習を受けて，帯結びの体験の授業を行った次時。 ・体験前と体験後の和服に対する思いや考え方の変化を見とる。	
特に関わる要素Ⅰ～Ⅲ 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力 要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神 協調性・柔軟性，責任感・使命感 要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ		教科等で身に付けたい力（本時について） C(1)ア ・衣服と社会生活とのかかわりに関心をもち，時・場所・場合に応じた衣服を着用しようとしている。 ・目的に応じた着用や個性を生かす着用について考え，工夫している。	
授業のポイント・流れ			
○金沢大学教育実習期間の実践。 ○教員1名では，指導にあたって目が行き届かないなどの不安があったので，実習生4名と教員1名で1クラス40名の指導にあたった。 ○金沢大学実習生4名が浴衣の着装を説明する動画を作成した。 ○前時に帯結び（男子は貝ノ口・女子は文庫）を体験した。			
			
○（2週間前に）和服と洋服の構成の違い（立体構成と平面構成）について学習した後，実際に浴衣を着てみることを伝えた。 1生徒の感想「難しそう！」「できないよー」 「めんどくさそう」「動きづらそう」 「歩き方とか変わりそう」「はずかしい」など			
○着用前の感想を思い出しく実際に着てみてどう感じる？>という部分に焦点をあてた。 「動きにくそうと思っていた人，実際に着てみてどうですか？」 「めんどくさそうと思っていた人，実際に着てみてどうですか？」 「普段の制服姿の友人と比べて，どんな印象ですか？」など			
○着装時の写真を生徒に配付し，ワークシートに貼った。 ○生徒は実際に着装した後の思いをワークシートにまとめた。 ワークシートより：「また着てみたいと思った。」「意外と簡単だった」 「いつもは家の人に着せてもらっているけど，自分で着られるようになりたいと思った。」「来年の花火大会が楽しみです」			

実践事例

技術・家庭科（家庭分野）2年

授業者 橋本 正恵	授業日 7月 12日（水） 1限～4限	
授業クラス, 教科等名 2年 1～4組	関係・連携の考えられる教科等 技術 理科 数学	
扱う伝統文化 ●生活文化 ●伝統文化 ●地域文化 ●現代の日本文化	授業内容 技術分野と連携して行った「塩」に関する題材の最終時。これまで、塩の特性や塩を使った調理などについて学習したことを踏まえて、野菜を漬物（一夜漬け）にし、主食・主菜・副菜2品からなる「お弁当」を調理する。野菜は、学校の畑で技術の授業で栽培したものを使う。	
特に関わる要素Ⅰ～Ⅲ 要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力 要素Ⅱ ●主体性・積極性 ●チャレンジ精神 ●協調性・柔軟性, 責任感・使命感 要素Ⅲ ●異文化に対する理解と ●日本人としてのアイデンティティ	教科等で身に付けたい力（本時について） B（3） 地域の食材を生かした日常食などの調理を通して、地域の食文化に関心をもっている。 基礎的な日常食の調理について、調理に必要な手順や時間を考えて計画したり、食品の調理上の性質を生かした調理を工夫したりしている	
授業のポイント・流れ ○技術分野と連携して「塩」に関する題材を構成した。 ○5月より「肉と魚の調理」の学習をベースとして生活の中での「塩」の利用について、や「塩」の購入に関する消費生活の学習内容も含めて実践した。 ○2時間前に「塩」による離水効果などの実験をキュウリを使って行った。 ○「豚のしょうが焼き」を主菜、「かぼちゃサラダ」と「野菜の一夜漬け」を副菜、米飯を含めて一食分の弁当作りを行った。 ○使った食品（豚肉・かぼちゃなど）は全て石川県産のものとし、地産地消の意味について体験を伴って考える機会とした。 ○かぼちゃサラダのかぼちゃは、加賀野菜の一つである「打木赤皮かぼちゃ」を使い、地域に伝わる「加賀野菜」への関心を高める機会とした。 ○「漬物」は、日本の各地で古くから伝承されている保存食であり、塩の腐敗効果をはじめ微生物利用などの知恵を生かした食品であることを、体験を踏まえて考える。 ○本時の実習を踏まえて、夏休みの課題としてレポート「家族のためにお弁当を作ろう」を設定した。	  	

実践事例

技術・家庭科（家庭分野）3年

授業者 橋本 正恵		授業日 11月16日（木） 1限～ 4限
授業クラス、教科等名	3年 1～4組	関係・連携の考えられる教科等 社会 体育
扱う伝統文化	授業内容	
<ul style="list-style-type: none"> 生活文化 地域文化 	<ul style="list-style-type: none"> 伝統文化 現代の日本文化 	
<ul style="list-style-type: none"> 住まいの基本的な役割について知る。 →生活行為と生活空間の関係 家族が共に住むための工夫について考える。 →部屋の様式や生活のスタイルなどによって住まい方を工夫する。 		
特に関わる要素Ⅰ～Ⅲ	教科等で身に付けたい力（本時について）	
要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力	C（2）アイ	
要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神 協調性・柔軟性 責任感・使命感	<ul style="list-style-type: none"> 自分や家族の住空間と生活行為とのかかわりについて関心をもって学習活動に取り組んでいる。 住居の基本的な機能について理解している。 	
要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー		
授業のポイント・流れ		
<ul style="list-style-type: none"> ○住生活に関する学習題材の最初の時間です。 ○基本的な住まいの役割や住まいに必要な空間などについて、基本的な知識の確認をします。 ○社会の地理分野で学習した、気候と住まいの工夫についての学習を踏まえます。 ○和室（床座）と洋室（椅子座）のそれぞれの良さについて考える場面で、日本文化の良さ・特徴について理解を深めます。 ○家族の住まい方の工夫について考える場面で、高齢者や幼児の行動や考え方、生活スタイルなどを考慮し、家族が協働してよりよい生活を創り出すことができる力を育みます。 		
		